



# 「不在であること」の能意性(signifiacnce) : 60 年代レヴィナスに於ける痕跡概念の展開について

藤本, 崇史

---

(Citation)

愛知 :  $\phi \iota \lambda \omicron \sigma \omicron \phi \iota \alpha$ , 33:1-13

(Issue Date)

2023

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100481894>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481894>



## 「不在であること」の能意性(signifiante)

### ——60年代レヴィナスに於ける痕跡概念の展開について——

藤本 崇史

#### 序論

我々がエマニュエル・レヴィナス(1906 - 1995)の「痕跡(trace)」概念に特権的に注目する所以は、それが〈他者[*l'Autre*]

レヴィナスの1960年代は、『全体性と無限』(1961年)と『存在するとは別の仕方  
で 或いは存在することの彼方へ』<sup>(1)</sup> (1974年)という二つの主著の過渡期として位置付けられることが多い。「痕跡(trace)」をはじめ、「隣人(*prochain*)」や、主体とのその「近さ(*proximité*)」といった諸概念は実際、この時期に導入されたものである。またこの時期のレヴィナスの思想を論ずるに当たっては、デリダ「暴力と形而上学」(1964年)の影響も無視することはできないだろう。

しかしレヴィナスの痕跡概念はデリダに由来するものではあり得ないし(これはそもそも文献学的に誤りである)<sup>(2)</sup>、それぞれの論文同士が少なからぬ差異を有していることを忘れてはならない。わざわざデリダに触れたのは、むしろ「暴力と形而上学」以前から——『全体性と無限』の刊行前後からと言ってもよい——レヴィナスは「痕跡」の問題を、既に重要なものとして認めていたのだということを強調するためである。プロティノスに着想を得る形で導出されたレヴィナスの痕跡概念は、その後の諸論稿を通じて、具体的な他人の「現在すること(*présence*)」が、超越者の「不在であること(*absence*)」を意味することとして展開されるようになるのだ<sup>(3)</sup>。

本稿は60年代レヴィナスの思想的深化を、痕跡概念の展開に於いてこそ見出そうとするものであり、先取りして述べるならば、「現前/現在(*présent*)」と「現在すること(*présence*)」との区別の明確化によって、超越者の「不在であること(*absence*)」と、

他人の「現在すること(*présence*)」との表裏一体性という主張を可能にせしめたことこそが、痕跡を巡るラディカルかつ豊穡な議論の展開に一役買っているのだと主張するものである。

ここでひとつだけ注意を促しておきたいのだが、痕跡概念の展開を論じるに当たって、レヴィナスによる現象学的時間論の詳細なる分析を抜きにすることは不可能である。しかし極めて複雑な後期フッサール時間論の、60年代レヴィナスによる再検討を正面から分析するには余りにも紙幅が少ないため、結果的に本稿は、レヴィナスの痕跡概念が如何なる構造を有するのか、という大局的な観点から議論を進めることになるだろう。これは決してレヴィナスによる後期フッサール時間論の再受容の価値を損なうものでもなければ、こうした問題系と不可分な痕跡概念の意義を矮小化するものでもないということを附言しておきたい<sup>(4)</sup>。

## 1. 「意味作用(*signification*)」と「意味されるもの(*signifié*)」との非一連続性

本節では「他者の痕跡」<sup>(5)</sup> (1963年)を中心に揺籠期の痕跡概念を分析することで、その特異性が超越たる一者の意味作用(*signification*)と、意味されるもの(*signifié*)としての痕跡との断絶にこそ存するというを確認したい。

まず「他者の痕跡」に於いて、レヴィナスは痕跡を、他人が発話を介して我々に顕現する仕方である「顔(*visage*)」が由来するところの「彼方(*l'au-delà*)」——すなわち超越——が意味することであると考えている<sup>(6)</sup>。既にレヴィナスはプロティノスに於ける一者を「〈存在〉の彼方に」(*EDE 265/274*)指定された超越として検討していたのだが、確かにプロティノス自身の思想に於いても一者は超越であり、知性や魂、そして存在が流出する源泉なのであった。そしてこの一者は隠蔽されているわけだが——少なくとも神が現前ではないということについては、容易く同意が得られよう——、レヴィナスは一者が「存在の彼方」にある理由が、それが隠蔽されているということに由来するものではないと強調する。

一者が隠されているのは、一者が存在の彼方にあるからであり、一者が存在とは全く別物であるからなのだ(*EDE 265/274*)。

この時点で既に読者は、レヴィナスに於ける一者解釈の異質性に気付かされるこ

となる。というのもプロティノスにとって、充溢した一者からこそ存在は流出するのであって、一者はいわば存在の源泉なのであった。故に一者と存在はあくまで連続性の中で考えられるべきなのであるからして、決して「全く違う」とまでは言えないのだ。レヴィナスは存在と一者との連続性を拒否した上で、自我が一者へと向かうこの運動を「〈他[Autre]〉へと向かう〈同[Même]〉の、決して〈同〉へと回帰し得ぬ運動」<sup>(7)</sup> (EDE 266f./276)であると考ええる。

ここで重要なのは「他人(Autru)は絶対的に〈不在なるもの[l'Absent]〉から生ずる」(EDE 276/288)と述べられているように、具体的な他人と超越者が区別された上で、後者が前者に先行するものとして考えられていることである。そして「一者(l'un)」は——「他者のための一者(l'un-pour-l'autre)」として術語化された上で、「倫理的」な主体性を意味するようになる『存在の彼方へ』とは異なり——あくまでプロティノスの一者に纏わる言及がある以上、第一義的には超越者として解されなければならない。故にここでの〈他者〉ないし〈他〉とは、具体的な他人が現出する仕方であるところの「顔」を可能にするような超越者を指しており、それがあくまで〈他者〉と言明されるのは、この一者が主体にとっての絶対的な〈他なるもの〉であるからなのである。またこうした理由ゆえに、「他者の痕跡」というこの論文の表題が意味するものは「他人の痕跡」ではなく、端的に言えば「超越者の痕跡」を表すものなのだ。

したがってもはや、自己自身のテオリアを通じてエクスタシスの境地へと達することで、一者との合一を図ろうとするプロティノス的な方向性は放棄されているのであって、一者へと向かう運動、すなわち「同一化作用の中に回収されない〈他者〉への運動」(EDE 266/276)に於いて、こうした超越者たる〈他者〉との合一が図られることはあり得ないだろう。

さて一者たる超越は、痕跡としてのみ意味するのだが、この痕跡は「痕跡としての痕跡」(EDE 281/294)と言われるような特異な痕跡である。獣の足跡や犯罪者の遺留品、古代文明の遺跡などといった通常の意味での痕跡は、一般的な記号としての指意性を有しているのだが、一者という〈他者〉の痕跡は特異な痕跡であって、「誰かの痕跡はその者の過去を指意するのではなく……その痕跡は攪乱(dérangement)そのものなのである」(EDE 282/295)と考えられているのだ。今度は一者と痕跡との非連続性が述べられているのだが、痕跡に於けるこの特異な攪乱を語るに際して、レヴ

イナスはプロティノスの『エンネアデス』第32論攷を引用する。

諸々の存在よりも前の原理のことになると、〈一者〉、こちらはそれ自身のうちにとどまっ  
たままなのであるが、しかし〈一者〉がとどまっているからといって、諸存在を〈一者〉  
に合わせて生じさせるのは、〈一者〉とは異なるものではない。諸存在を生み出すためには  
〈一者〉で十分なのだ……ここでは、〈一者〉の痕跡が本質を生ぜしめるのであって、存在  
は〈一者〉の痕跡でしかないのである(EDE 281/293f)。

プロティノスの一者は、一切の他なるものを必要とせず痕跡を残すが故に、一  
者とその痕跡は、制作者と制作物のような関係の類比関係には無い。形相の類比性  
や存在の完全性に於ける因果関係とは異なる仕方で、一者がその痕跡を生成するが  
故に、一者は自らの痕跡を「超越している」と考えられるのである。小手川が指摘  
しているように、他ならぬプロティノス自身も一者に於ける形相の不在を強調する  
ことによって、一者と痕跡との非連続性を主張し続けている<sup>(8)</sup>。

このように一者と断絶しているのにもかかわらず、痕跡は一者の「不在であるこ  
と(absence)」(EDE 275/287)を意味するのだという。そして既に先行研究が整理してい  
ることではあるが、この「不在であること(absence)」は潜在性としての不在概念、象  
徴関係に於ける不在概念、単なる無としての不在概念のいずれにも属していないと  
いうことが論じられている<sup>(9)</sup>。一者の不在は、存在と無のどちらにも属さない第三  
項として考えられており、これは「何も顕示しないし何も隠しもしない(EDE  
279/292)」ということで、顕在性と潜在性との二項対立にも属さないのである。

注意すべきはこの「不在であること」を「記号」として解する場合であろう。「他  
者の痕跡」のみならず「意味作用と意味」<sup>(10)</sup> (1964年)に於いても、「痕跡は他の  
記号のような記号ではない。しかし痕跡はまた、記号の役割をも果たしている」  
(EDE 278/291;HAH 66/97)と主張されているように、確かに痕跡を一種の記号として捉  
えることは可能であるが、それでも痕跡は、単なる象徴関係には解消され得ない特  
異性を有するのだとされている。では痕跡が、他の記号一般に対して有する特異性  
とは一体如何なるものなのであろうか。

我々は痕跡に於いて「意味内容(signifié)」と「意味作用(signification)」とが連続性  
を持たない、ということがはっきりと述べられていることに改めて注目したい<sup>(11)</sup>。

痕跡は単に一者の意味作用を指示するのではなく、通常の象徴関係に措いて前提とされるような意味作用と意味されるものとの連続性を掻き乱すのであった。

そしてそもそも痕跡とは、「顔」がそこから出来るところの超越が意味することとして考えられてきた点に注意するならば、一者と痕跡との非連続性とは、主体にとっての〈他者〉たる超越者ないし一者の諸運動と、そうした運動の意味内容たる痕跡が——先取りして言うならば——「現在すること(*présence*)」との断絶を指しているのであって、この断絶こそが痕跡を極めて特殊な記号へと仕立て上げているのである。そしてこの断絶は、痕跡に於いて超越者たる〈他者〉が「不在であること」と、〈他者〉自身が決して居合わせることのない痕跡が「現在すること」との両立を可能にするのだ。

## 2. 「現前／現在(*présent*)」と「現在すること(*présence*)」

痕跡は超越者たる〈他者〉の「不在であること(*absence*)」なのであったが<sup>(12)</sup>、この「不在であること」が潜在性でも単なる無でも、或いは一般的な記号でも無いのだとしたら、痕跡は如何なる意味を持ち得るのであろうか。これが「永遠が浮かび上がるところの〈他者〉の過去(*passé*)への通路(*passé*)そのもの」(*EDE* 281/294)であるとは如何なる事態を意味するのであろうか。本節では「他者の痕跡」及び「謎と現象」に於ける、「現前／現在(*présent*)」と「現在すること(*présence*)」との一貫した区別という重要な論点を指摘した上で、次節でこの区別がもたらした具体的な意義について考察したい。

「他者の痕跡」では、超越者としての一者ないし〈他者〉が痕跡に於いて「不在であること」が「或る能意性(*signifiance*)を含んでいる」(*EDE* 275/287)とされた上で、むしろこの「不在であること」が、「顔」の「現在すること(*présence*)」と分離され得ないものであるということが主張され<sup>(13)</sup>、痕跡は「厳密に言えば、一度もそこに存在したことのないもの、永久に過ぎ去って行ってしまったものの現在すること(*la présence*)である」(*EDE* 280/293)と位置付けられていた。しかもこうした痕跡の「現在すること」は、決して主体の生の「現前／現在(*présent*)」には属さない「現在すること」であるのだという<sup>(14)</sup>。

「謎と現象」<sup>(15)</sup> (1965年)に於いても、「誰かの痕跡はその者の過去を指意するのではなく……その痕跡は攪乱(*dérangement*)そのものなのである」(*EDE* 282/295)とい

う「他者の痕跡」の主張が継承されているのだが<sup>(16)</sup>、そこではこの攪乱が「秩序(ordre)を攪乱する他性(altérité)」(EDE 293/307)であると述べられている。能作の主体として築き上げた、エゴイスティックな内部性に安住する自我の秩序を攪乱するのは、超越者たる〈他者〉の痕跡なのであるが、そのためにはやはり「〈他者[l'Autre]〉の過去が決して現前／現在(présent)であったことがないのでなくてはならない」(EDE 294/308)のだ。いずれの論稿でも区別されている「現前／現在(présent)」と「現在すること(présence)」との位格を、少し掘り下げてみることにしよう。

まず「現前／現在(présent)」であるということは、何らかの出来事が自己意識に対しての現前化(présentation)ないし再現前化＝表象(représentation)へと供せられる事態を意味するものであるからして、ここで述べられている「〈他者〉の過去」とは、意識によっては決して現前化せしめられることなき、超越者の絶対的な過去を指す。先んじて「他者の痕跡」を論ずるに当たって、他人と〈他者〉との区別に注意を促しておいたのだが、この区別は「謎と現象」の検討に際しても重要である。というのも仮にここでの〈他者〉が具体的な他人を指すと考えるならば、そもそもその過去は、当の本人によって一度は現前化されたことのある過去なので、「決して現前／現在(présent)であったことがない」という主張が成り立たなくなってしまうだろう。したがってこの「過去」は、具体的な他人の過去を私が全て知ることができないなどといった話ではなく、主体による超越者の現前化が、これまでも——そしてこれから——決してあり得ないということの意味するが故に、「〈他者〉の過去」の筋立ては「謎(enigme)」(EDE 291/305)だと述べられているのである。

次いで「現前／現在(présent)」に対する「現在すること(présence)」とは、自我による対象化や自己意識による現前化に常に先行する形で、他人の「顔」が「居合わせること＝現在すること」を意味する。但しこれも、超越者としての〈他者〉が直接的な現象として、我々の前に立ち現れてくるわけではない（もしそうだとすれば、〈他者〉が他人ではなく超越者を意味する以上、ここでの議論は啓示宗教の復権を要請するものへと転じてしまうこととなるだろう）。そうではなく、ここでは「顔」の「現在すること」が、超越者の「不在であること」を示すところの、痕跡の本質にこそ由来するのだという、後期レヴィナス思想のライトモチーフとも言える主張が反復されているのであって、実際に痕跡に於ける〈他者〉の「不在であること」に於ける、超越者の過去という時間性が重視されるにつれて、『全体性と無限』で中

心概念となっていた「顔」は次第に言及されなくなってゆくのである。

ひとまず我々は「他者の痕跡」及び「意味作用と意味」、そして「謎と現象」に於ける痕跡概念が、超越的一者の「不在であること」と、他人の「顔」が「現在すること」との表裏一体性に基づいて論じられているという点を確認した。そしてこの痕跡が他人の「顔」として「現在すること(présence)」とは、決して自己意識による現前化へと供されることのない、超越者たる〈他者〉の過去という特異な時間性を意味するのだということを瞥見したわけである。

### 3. 「不在であること」が拓く隘路

しかし痕跡が「主体の生の現前／現在(présent)なき「現在すること(présence)」であるとして、それが不在なる超越者の絶対的過去を意味すると言われても、今ひとつこの痕跡の意味するものが十分に明かされたようには思われまいだろう。以下では「謎と現象」の二年後に発表された論文「言葉と近さ」<sup>(17)</sup> (1967年)を検討し、痕跡に於ける「現在すること(présence)」が、その現象性の徹底的な排除を通じて純化されてゆく過程を辿ることで、レヴィナスのいう痕跡の「現在すること」が、もはや素朴な意味での「現在」という瞬間ではあり得ないということを振り返りつつも、この痕跡の「現在すること」を基づけるところの、超越者の「不在であること(absence)」の能意性とは、神学なき超越への隘路を示すものであり、一種の無神論——ラディカルな表現だが、実際そうである——への要請なのだということを明らかにする。

まず初めに、「不在であること」と「現在すること」に纏わる具体的な議論が、「言葉と近さ」に於いてはもはや「顔」ではなく、我々に最も近い他人とされる「隣人(prochain)」の問題系に於いて論じられているということに注意したい。レヴィナスの隣人概念は、端的に言うならば、我々が隣人を意識する以前に既に隣人がそこに居る、といった事態を示すものであり、主体と隣人との関係は「近さ(proximité)」であると言われている。但しレヴィナス自身がはっきりと隣人は土着的でないとして述べているように<sup>(18)</sup>、この「近さ」は空間的な距離の近接性にのみ限定されているわけではない。したがって「隣人」は、単に自分の隣の部屋に住んでいる者だけを指すわけではないのだ。

さて「隣人の現在すること(présence)」に於いて、不在であること(absence)に軽く触れ

ることとなる」(EDE 321/338)という一文は、「隣人は現前する」という命題、そして「隣人を經由して超越者それ自身に接触することができる」などといった主張とは区別されなければならない。再三に渡って「隣人は現象(phénomène)ではない」(EDE 322/339)と主張され続ける所以はもちろん、この隣人が決して主体によって理解され得ぬ異他性を有するものとして考えられているからであるのだが、他にも隣人を現象として捉えることは、超越者たる〈他者〉へと向かう主体の運動に於いて、当の隣人が主体と超越者との間の媒介項へと貶められる危険性を有している。これの何が問題なのかというと、隣人のアイコン化が、何らかの啓示宗教ないし肯定神学の亡霊を甦生させてしまうということなのだ。そして隣人の「現在すること」も、メシア自身の顕現を可能にするのではなく、あくまで超越者の「不在であること」を意味するものでしかない。レヴィナス哲学が旧約聖書に於ける金の仔牛や『ツアラトウストラ』に於ける驢馬祭りのような戯れを奨励するものではあり得ない以上<sup>(19)</sup>、ここで隣人を単なる現前、或いは現象と見做すことは厳に慎まなければならないだろう。

既に『全体性と無限』の時点で——もちろん同書では未だ「隣人」は主題化しておらず、「顔」が中心的な概念として扱われているのだが<sup>(20)</sup>——、「内容であることの拒否に即して顔は現前する(le visage est présent)」(TI 211/292)、或いは「〈他人〉の現在すること(présence)の了解不能な性格」(TI 212/293)と述べられていたように、他人の「顔」は自我によっては決して理解され得ない「現在すること(présence)」として考えられていた。しかしその一方で、先の二つの引用がおおよそ同じような内容を表していることから、同書の時点では *présent* と *présence* に意味上の大きな区別は与えられていないことが分かる。更には「顔に於ける存在の現前化(présentation)」(TI 67/95)といった記述がみられることから明らかであるように、同書でレヴィナスが *présentation* と *présence* を意識的に区別していたとは考え難い。

これに対して「言葉と近さ」に於いては、「不在であること」が論じられるのに当たって「現前化(présentation)」と「現在すること(présence)」とがはっきりと区別されている<sup>(21)</sup>。この区別は明らかに、前節で論じた「現前/現在」と「現在すること」との区別を踏襲するものなのだが、「言葉と近さ」では現前/現在(*présent*)が「現前化(*présentation*)」と明言されることで、その現象学的位格に於ける能作としての側面が強調されている点が特徴的である。いずれにしてもここで前者の「現前化」と

は、過去把持—原印象—未来予持による諸射映の綜合を介することで、対象を自己意識に於いて現象たらしめる作用を意味しているのに対して、後者の「現在すること」は、志向性による一切の現象学的時間の構成に先立つ、ある意味非—時間的な「生き生きした現在(*lebendige Gegenwart*)」に於ける先所与、つまり「原ヒュレー(*Urhytle*)」を指すものである<sup>(22)</sup>。したがって「隣人は現象(*phénomène*)ではなく、隣人の現在すること(*présence*)が現前化(*présentation*)や現れ(*apparaître*)に転じることはない」(*EDE* 322/339)と主張される所以は、レヴィナス自身が「現前／現在(*présent*)」という語の意味を、現象学的な現前化(*présentation*)ないし再—現前化／表象(*représentation*)に限定したことに存しており、この限定によって明確化された「現在すること(*présence*)」と現前との区別を通じて、痕跡に於ける不在が現前化には決して汲み尽くされ得ないものなのだということが主張されるようになるのだ。傍証として、「他者の痕跡」と「言葉と近さ」の間に発表された論文「志向性と感覚」<sup>(23)</sup> (1965年)に於いて、レヴィナスがフッサールの未刊草稿を参照していることを挙げて良いだろう<sup>(24)</sup>。隣人が現前や現象ではあり得ない以上、もはや「顔に於ける存在の現前化(*présentation*)」(*TI* 67/95)とか、「他人(*Autrui*)は現象(*phénomène*)の始原である」(*TI* 92/131)などと言われることはないのである。

さて、隣人それ自体の「現在すること」が超越者の「不在であること」によって秩序づけられているのだが、以上に述べた区別より、この「不在であること」は現前化(*présentation*)などという自我の能作との関わりに於いて論じられるべきものではなく、当の隣人の「現在すること(*présence*)」に於いてこそ論じられるべきであり、隣人の「現在すること(*présence*)」は超越者の「不在であること(*absence*)」と重ねられているのだ。繰り返すようだが、こうした主張を「我々は隣人の「現在すること」を通じてしか、超越者にアクセスできない」というような神学的命題と混同してはならないだろう。レヴィナスに於ける超越への運動は、偶像を媒介することも、何らかの存在者を經由することもないし、遙かな未来に顕現するやもしれぬメシアを期待するような存在—神学(*l'onto-théologie*)でも決してあり得ないのだ。故に痕跡に於いて超越者の「不在であること」が意味するものとは、決して超越者自身の存在が自己意識によって現前化されないということであり、一切の神学の拒絶であり、一種の無神論への要請なのであって、より正確な言い方をすれば、痕跡に於いて超越者が「不在であること」とは、超越者を存在論的次元に置くことの禁止を意味

しているのである。

## 結語に代えて

しかし隣人の「現在すること」が——レヴィナスが言う「隣人」が如何に常軌を逸脱した超一空間的、超一時間的なものであったとしても——超越者の「不在であること」によって秩序付けられるとする主張は、それでもやはり一種の神学を要請するものではないだろうか。つまり隣人の「現在すること」と超越者の「不在であること」との正反両立性の議論が、「顔」の現象性を斥けることで啓示宗教の可能性を排除し、存在一神学なき一種の無神論への要請を可能にしたとしても、これは逆説的に否定神学へと導かれる危険性を常に有しているのではなからうか。

こうした疑問に応じるレヴィナスのテキストは、徹底した否定神学批判が展開される『存在の彼方へ』<sup>(25)</sup>を措いてあり得ないだろう。本稿では考察の対象を60年代の諸論稿に限定したが故に立ち入る余裕は無かったが、同書に於ける存在論的言語への周到な批判を検討することによって、痕跡がもはや存在一神学の次元にはないような肯定的能意性を獲得するに至る、展開の最終段階が明らかにされることとなるのだ。

## 註

- (1) 以下『存在の彼方へ』と略記する。同書に関してはハードカバー版とポッシュ版とで頁付の異同が甚だしいため、全てフェノメノロジカ叢書のハードカバー版を参照した。
- (2) 少し前の先行研究を掘り起こしてみれば、こうした誤解が散見される。cf. Feron(1992: p.259ff)
- (3) このような煩雑な訳語を採用した理由については、後掲註13を参照されたい。
- (4) なお1960年代のレヴィナスによるフッサール時間論の再読解の内実とその意義に関しては、Drabinskiの網羅的な研究が現在でも有用である。また「反復(itération)」概念を軸としてこれを扱った、林航平の卓越せる論文も参照されたい。更にレヴィナス哲学を時間論的に読解することで、その体系性を明らかにしようとする石井雅巳の近年の研究も、現象学的時間論に即して後期レヴィナスの読解を試みる系譜に属すると言える。Cf. Drabinski(2001);林航平(2021);石井雅巳(2022).
- (5) Emmanuel Lévinas. «La trace de l'autre»(1963), in *EDE*.

- (6) Cf. *EDE* 276/288f.
- (7) 『全体性と無限』で用いられている術語が「他者の痕跡」でも多用されている一例ではあるのだが、ここでは端的に〈同〉は主体のエゴイスティックな自同性、〈他〉は主体に対しての〈他者〉であると解すればよい。但しこの〈他者〉は外的な他人に限定されているわけではないことには注意しておきたい。後述するが、この文脈で述べられている〈他〉は明らかに超越者たる一者のことである。関連するものとして『全体性と無限』の「他人 (Autrui)」と〈他者 [l'Autre]〉の区別を扱った優れた先行研究を挙げておきたい。cf. 小手川 (2014).
- (8) Cf. 小手川(2012:87f). なお小手川は、こうした解釈が『エンネアデス』の読解として問題を含んでいないわけではないということを主張しているが、本稿の企図はレヴィナスによるプロティノス解釈の妥当性を検証することには存していないため、これ以上踏み込むことはしない。
- (9) Cf. 小手川(2012:86). 但し「他者の痕跡」では、小手川が言うほど体系的な形で「不在であること」が論じられているわけではない。
- (10) Emmanuel Lévinas. «La signification et le sens»(1964), in *HAH*. なお、この論文の後半部は「他者の痕跡」の要約となっており、丸々引き写されている節も多い。ここで引用した箇所も、一点の異同も無き、全く同一の文である。
- (11) 「意味内容(signifié)と意味作用(signification)との間の関係は、痕跡に於いて、相関関係ではなく、非直線性(irrectitude)そのものである」(*EDE* 277/289;*HAH* 64/95). 前掲註 10 と同様、「他者と痕跡」と「意味作用と意味」とで全く同一の文である。
- (12) Cf. *EDE* 275/287.
- (13) Cf. *EDE* 278/290. なおこの文脈で *présence* は「居合わせること」を意味しており、自我が諸射映の綜合を介して対象を意識することとは区別される必要がある。ここで「現前性」と訳した場合、「言葉と近さ」に於ける *présence* と *présentation* との区別 (本稿では前者を「現在すること」、後者を現象学的な意味での「現前化」と訳す) が曖昧になってしまう一方で、「居合わせること」と訳した場合は「不在であること(absence)」との対比が分かりづらくなってしまうことから、本稿では「現在すること」と訳出した。
- (14) Cf. *EDE* 281f/294f.
- (15) Emmanuel Lévinas. «Énigme et phénomène»(1965), in *EDE*.
- (16) Cf. *EDE* 290/304.

- (17) Emmanuel Lévinas. «Langage et proximité»(1967), in *EDE*.
- (18) Cf. *EDE* 322/339.
- (19) 「隣人」ではないが、既に「他者の痕跡」の時点でレヴィナスは「顔」のアイコン化を明確に拒否している。cf. *EDE* 282/295.
- (20) 既に『全体性と無限』に於いても「存在することに於いて、他人(Autru)の近さ(proximité)、隣人(prochain)の近さは、顕現の、自己表出する絶対的な現在すること(présence)の、抗い得ないひとつの瞬間である」(*TI* 76/107)という記述が見られるが、ここで隣人は外的な他人と相互置換可能な類比的表現という以上の意味合いを持たされているわけではない。
- (21) Cf. *EDE* 321/338.
- (22) この問題はフッサールの後期時間論(C 草稿)に於いて扱われる。なお、原ヒュレーの先意識的性格については以下の論文を参照のこと。cf. 佐藤(2003:85f)
- (23) Emmanuel Lévinas. «Intentionnalité et sensation»(1965), in *EDE*.
- (24) Cf. *EDE* 222, n°1/251, 原注 30; 林(2021:54-61).
- (25) Cf. *AE* 15/45;115, n°31/430, n°31;193/344.

## 参考文献

一次文献からの引用には原則として私訳を用いたが、訳出に際しては既出の邦訳を適宜参照した上で、原典/邦訳の順で頁数を附した。またレヴィナスの著作の参照に際しては記載の略号を用いた。なお『全体性と無限』の訳書は全三訳が存するが、本稿で参照に際して附記した頁数は全て合田訳のものであることを付記しておく。

Emmanuel Lévinas. *Totalité et Infini. Essai sur l'extériorité* (1961). Le Livre de Poche, 2000(=*TI*).

(合田正人訳『全体性と無限』国文社、1989年。熊野純彦訳『全体性と無限』(上下巻)岩波書店、2005-2006年。藤岡俊博訳『全体性と無限』講談社学術文庫、2020年。)

Emmanuel Lévinas. *En découvrant l'existence avec Husserl et Heidegger* (1967). Vrin, 2016(=*EDE*).

(佐藤真理人他訳『実存の発見』法政大学出版社、1996年。)

Emmanuel Lévinas. *Humanisme de l'autre homme* (1972). Livre de poche, 1998(=*HAF*).

(小林康夫訳『他者のユマニスム』書肆風の薔薇(現 水声社)、1990年。)

Emmanuel Lévinas. *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence* (1974). Kluwer Academic Publishers, 1991(=AE).

(合田正人訳『存在の彼方へ』講談社学術文庫、1999年。)

Etienne Feron. *De l'idée de transcendance à la question du langage. L'itinéraire philosophique d'Emmanuel Levinas*. Grenoble, Jérôme Million, 1992, p.259ff.

John E. Drabinski. *Sensibility and Singularity: The Problem of Phenomenology in Levinas*. State University of New York Press, Albany, 2001

石井雅巳「後期レヴィナスにおけるフッサール解釈と隔時性の生成」『現象学年報』第38号、日本現象学会、2022年、59-66頁。

小手川正二郎「〈存在の彼方〉の痕跡——レヴィナス哲学におけるプロティノスの「痕跡」——」『新プラトン主義研究』第11号、新プラトン主義協会、2012年、81-93頁。

小手川正二郎「レヴィナスにおける他人(*autrui*)と〈他者〉(*l'Autre*)——『全体性と無限』による「暴力と形而上学」への応答——」『哲学』第65号、日本哲学会、2014年、167-181頁。

佐藤幸三「感覚素材としての原ヒュレー *Urhyale*——後期フッサールにおける衝動的志向性の感覚素材として——」『哲学・思想論叢』第21号、筑波大学哲学・思想学会、2003年、81-90頁。

田口茂『フッサールにおける〈原自我〉の問題』法政大学出版社、2010年。

林航平「レヴィナス現象学の厳密さ——「反復(*itération*)」概念の方法論的射程」『宗教学研究室紀要』第18号、京都大学文学研究科宗教学専修、2021年、35-81頁。

(神戸大学人文学研究科博士前期課程1年)